よねだ ところどころ

第四十六号

ヨナダーが下米田・牧野の色々な見どころを紹介するよ

明治時代の小山大火災

明治政府の関口という役人が、明治８年に調査した巡察復命の中の「美濃国民俗誌稿」に掲載されたものである。その時の小山の戸数１３０戸、５８６名（内男３１５、女２７１）

去る明治七年(注)五月回禄に「罹(カカ)」り、村内大半焼失し今日に至りては真に疲弊を極めたり、然れども里人舟業を勉強し、数多くの利益を得る故に、今日の活計には乏しからず。とある　注　明治以降美濃加茂災害史によれば 1874.5 に小山大火とある

小山のどのあたりが燃えたか

左地図は、美濃加茂地理情報システムの原図の上に、明治初期の小山村絵図の集落部分を当てはめてみたものである。飛騨川の川岸はダム湖になってから水位が上昇したため、字川原の部分が水没している。明治期当時の小山観音の写真では、現在の観音橋付近は川原となっており陸続きであったことがわかる。小山の船溜まりは観音島より下流にあり、加茂高校のボート艇庫あたり、土井原付近にかけて、舟稼業の人々の集落となっていたようである。当時の小山の舟業従事戸数は 79 戸、農業を主体とするものは 47 戸、この 80 戸程度が全焼したものと推定される。従って、「村内大半焼失し」という記述となったと思われる。「村内の地勢、平坦なれども痩せ地、加うるに人口に比較するには田畑少なし。故に里人船業を以て稼ぎとなす者半に過ぐ。船業のもの７９戸。字を読みうる者２０余。算術に至りては百余人に及ぶべし。就学の生徒と雖も旧来の筆道を学ぶのみ。日々勉強をなすにあらず。」などと記している。簡単に言えば、「小山は痩せ地が多く、田畑は少ない。農業に携わる人は少なく、船稼ぎが多くを占める。学校はあるが、習字ぐらいしか教えていない。しかし、計算が出来る者が多い。」ということは、ものを数えたり、足したり引いたりする計算をすることが船業に従事することにリンクしていたとも思われる。大火があり、村の大半が消失したが、「船業による日銭稼ぎのため、日々の暮らしには事欠かないようである」また、「小山観音の下は船たまりとして良好な場所であり、この場所では里人が鯉や鮎を採っている」という記録を残している。